



# 勇者のその後 2

地球に帰れなくなったので  
自分の為に異世界を住み良くしました

α L P H α L I G H T

十一屋翠

JUUCHIYA SUI

アルファライト文庫



# ✧主な登場人物✧

✧サザンカ✧  
ミナミカ群島の全種族をまとめ上げる。  
サザンドラ族の長。狐の獣人。

✧タンポポ✧  
サザンカに仕える優秀な側近。  
ナイスバディの兎獣人。

✧シルファリア✧  
魔王の娘。勇者の命を狙っている。

✧サリア✧  
古の王女様。  
現代では失われた魔法を操る。

✧トウヤ✧  
地球から勇者として召喚された本作の主人公。  
とある事情で地球に帰れなくなったので  
異世界復興に励む。

✧エアリア✧  
勇者パーティのメンバーその1。  
ハーフエルフの魔法使い。  
可愛いが胸は小さい。

✧ミューラ✧  
勇者パーティのメンバーその2。  
おっぱいの大きな神官。  
お姉さんの存在。

✧ラザリア✧  
盗賊の村を治めている心優しい族長。

## プロローグ これまでのお話

異世界に召喚された勇者こと俺、トウヤ・ムラクモ。

まあ色々あって俺は魔王を倒す旅に出た。

それで激闘の末に見事魔王を倒したんだけど、死に際の魔王に不吉な事を言われたつていうのもあって、英雄として迎えられるのは辞退。

で、あえて元の世界へ帰る事を選んだんだ。

だが、いざ帰ろうとしたところで、帰還するための逆召喚術式にトラブルが発生。元の世界に戻る事が出来なくなってしまった。

途方に暮れたものの、まあせっかくの機会だ。帰る方法が見つかるまで、この世界をもう一度ゆつくりと見て回る事にした。

だけど、そんな呑気な旅を続ける中で目の当たりにしたんだ。

自分が思っていた以上に荒廃していた世界を。

こうして俺は、この世界を復興させようと決心する。

そんなこんなで復興を進めていたある日の事。

魔王の娘を名乗る謎の女性——シルファリアが俺に戦いを挑んできた。彼女の目的は、父親である魔王を倒した俺に勝利し、自らが魔王の名を継ぐ事。宿敵である俺と対峙した彼女は言った。

「貴様が勝ったら私を好きにするといい」

よし、全力で頑張ろう。

## 第一話 勇者、魔王の娘をゲットする

「ブレイブバースト!!」

魔王の娘シルファリアと戦う事になった俺はそう叫んで、早速向かってきた彼女に、魔力を放った。

「くうっ！」

大仰な技名ではあるが、実際には大量の魔力を衝撃波として正面に放つだけの雑な攻撃だ。

ただし、その衝撃波の幅は五〇メートル。勇者の莫大な魔力をふんだんに使った面制圧攻撃であり、そこに込められた魔力は、並みの魔族なら半殺しに出来る威力を持っている。実戦では、精密な攻撃を当てるなどとても出来ないのです、こうした大雑把な攻撃の方が有効なのだ。相手が実力者ならなおさらにな。

実際に、シルファリアは足を止めて防御に専念するしかなかった。

シルファリアが声を上げる。

「この膨大な魔力、なんというデタラメな攻撃だ！」

よし、このまま一気に戦闘不能に追い込むぞ！　そう思っていると、シルファリアが睨みつけてきた。

「舐めるなっ！」

シルファリアが翼を広げて上空へと飛び上がる。

こういう時、翼を持つ種族は卑怯だよな。魔力の消費なしで空に逃げられるんだからさ。飛行する魔法と攻撃魔法、実質二つの魔法を同時に使えるようなもんだ。普通は魔法を一つしか発動出来ないというのに。

「今度はこちらの番だ！　スターダストレインッ！」

シルファリアが魔法を発動させると、彼女の足元に巨大な魔力の塊が生まれる。

「極小の魔力の流星群、避けられるかな!?　行け！　流星よ！」

シルファリアの命令に反応し、足元の魔力塊から流星が降り注いだ。

「……さあ、無限の流星が奏でる恐怖を味わうがいい！」

「無限とは言いすぎだな！」

そう言う俺は全身に魔力障壁を展開しつつ、足の裏で魔力を弾けさせる。そしてその反発力で地上を弾丸のように駆けた。

だが魔力の流星群は、俺の回避行動をあざ笑うかのように広がる。さしずめ流星のスコールのような状態だ。

あまりの展開の速さに回避が間に合わなかった俺は、さらに全身に魔力障壁を発動して流星から身を守った。

「くうっ!？」

見た目は小さな流星だが、意外に一発一発の威力がある。こいつ一発あたり、中級魔法並みの威力があるぞ!?　それが数えきれないほど襲いかかってくるなんて、十分に大魔法クラスじゃないか！　一体あの魔力塊にはどれだけの魔力が込められているんだ!?

魔力障壁は魔力を全身に張り巡らせて魔法を相殺するという強引な技なので、防御魔法と違って呪文として発動しなくて済む。だが、襲いかかってくる魔法を完全に相殺するには魔力の消耗が大きい。この状況だと、すごい勢いで魔力がなくなっちゃうぞ！

しかし、これだけの威力と範囲の攻撃、長時間は維持出来まい。

俺は再び足の裏に魔力を集中させ、高速移動する。移動のための魔力操作に集中しつつも、防御のための魔力障壁をおざなりにする訳にはいかない。どちらを怠ってもこの流星雨の中では命取りになる。

俺はここで少しばかり計算を誤っていた。相手を普通の強いヤツくらいに考えていたのだ。魔王を倒した俺なら、一対一で負ける事はないだろうと。

だが、相手は魔王の娘。魔王を除けば、今まで戦った事のない強敵である。

「ふん、魔法の範囲外まで逃げるつもりか。だがな、ここからが本番、これがこの魔法の

真骨頂なのだ！」

シルファリアが意味深な発言をするのと同時に、次々に星が襲いかかってくる。

ガツン、ガツン、ガツン、ガツンガツン、ガツンガツンガツン、ガガガガツン、ガガガガガガガツン、ガガガガガガガツン、ガガガガガガガツン。

お、おいおい、ヤバイヤバイヤバイ！ 流星が俺の魔力障壁に激突しまくってる。早く魔法の範囲外まで逃げないと！

俺はさらに速度を上げて、魔法の範囲外へ急いだ。  
はずなのに。

「あ、あれ？」

なぜかいつまで経っても、シルファリアの魔法の範囲外まで逃げる事が出来なideいた。一体どれだけ広範囲の魔法なんだ!?

すでに魔法の範囲外へ脱出しているはずなのに、なぜか俺はシルファリアの魔法のど真ん中に続けた。

もしやこれは……

「この魔法、追尾型か!？」

シルファリアが正解だと言いたげにニヤリと笑う。

なんてアホな事をする奴だ！ 普通これだけの大魔法に追尾機能なんて持たせないぞ。

この魔法は、大量の強力な魔力弾を無差別かつ広範囲に射出する。それだけでも結構な魔力が必要だろうに、さらに追尾機能まで持たせたらとんでもなく魔力を消費するぞ！

マジックアイテムなんかで魔力を補ったとしても、何発も撃てないのは間違いない。それだけこの魔法に自信があるのか？

「そのとおりだ！」

俺の思考を読んだのだろう。シルファリアは自信ありげに返答してきた。

だから俺は――

「え？ マジ!? ホントにパンツを見せつけるためにわざわざ空に浮かんでたの!？」

「は？ ……っ!？」

そう指摘してやったのである。

シルファリアは真っ赤になってスカートを押さえる。

「何だよー、見せてくれるために俺の上で浮いてたんだろー?」

「そ、そんな訳ないだろう！ 私がその通りと言ったのは、この魔法に絶対の自信を持っている！ 確実にお前を倒す事が出来るという意味だー!」

うん知ってる。

お前を挑発するために、わざと的外れな事を言ったんだよ。プライドの高い奴はこういうのに乗りやすいからな。だからこそ、わざわざ眼福なポジションに俺がいたのをバラシ

てまで挑発したのだ。

うん、挑発だよ、挑発。決して脚を閉じた事を残念に思っ  
てなんかないませんよ。

「ええい、スケベな奴め！」

失敬な。俺ほど誠実で心の清い勇者はいないというのに。

「だが、どれだけふざけようとも、お前が私の魔法から逃げられない事  
に変わりはない！魔法切れを期待しても無駄だぞ。この両腕のリングの宝石は、膨大な魔力を蓄積する特殊な鉱石で出来ている。これがある限り、私がお前よりも先に魔力切れになる事はない！」

クソ、予備バッテリー付きかよ！

確かにシルファリアの言うとおり、今の俺は彼女の魔法から逃げられずにいた。このままでは俺の魔力が切れるのも時間の問題だ。一応は魔力を回復させるポーションも魔法の袋の中にあるが、相手の予備バッテリーの容量が分からない以上、それに頼る訳にもいかない。

「ふははははっ！我が奥義の威力、思い知ったか！この流星は一発一発の威力はそれほどでもないが、連射を受け続ければ並の魔力障壁では耐える事など出来んぞ！」

しまったな、これは相手を甘く見ていた。この魔法はいわばゴリ押し決戦魔法だったようだ。

「光栄に思うがいい。この魔法を使うのは父上以外でお前が初めてだ！最初の攻撃を受

けた時に、全力を出して戦わなければ勝てぬ相手と確信したのだからな！」

「そりゃ、光栄だ……」

このままシルファリアの魔法が途切れるまで耐えるか、それとももう一度あの魔法の範囲外まで逃げるか。

いくらシルファリアの魔法が追尾式といえども、無限の射程を持っている訳じゃないだろう。ここは一旦シルファリアから離れる事で魔法の射程から逃れ、仕切りなおした方が良さそうだな。

「そうと決まれば！」

戦術を決定した俺は、魔力障壁の強度を維持しながら後退を始める。

「はははっ！私の魔法には勝てぬと諦めたのか？」

自分の魔法に絶対の自信があるのだらう。シルファリアが余裕の笑みで俺を見下してくる。両手でスカートを押さえながら。

「恥ずかしそうにしながらそんな事言われても、全然怖くないなあ」

「き、貴様が私のパンツを覗くからだらうが！」

後退しながら俺はシルファリアへの挑発を続ける。

「だったら下に降りればいいだけだろ。カッコつけて上にいるからパンツが見えるんだ」むしろあんなエロい格好で来た方が悪いのだ。パンツを見られたくないならそんな短い

スカートを穿く<sup>は</sup>なというやつである。

「ふん、挑発は無駄だぞ！ 私を地上に誘い込んで接近戦<sup>おちこ</sup>を狙<sup>ねら</sup>っているのだろう？ だが私がこうして空にいれば、貴様は飛行魔法で接近するために一旦防御魔法を解<sup>と</sup>かざるをえない。そうなれば、我が流星雨で人間の脆弱<sup>じやくじやく</sup>な体はあつという間に蜂<sup>はち</sup>の巣だ。攻撃魔法で迎撃<sup>げいげき</sup>しようとしても同様だ。つまりお前に出来るのは逃げるだけという事だ！」

ふーむ、シルファリアのヤツ、俺が接近するためには飛行魔法が必要だと言ったな。という事は、俺が空を飛んでいる自分に接近するには飛行魔法しか方法がないと決めつけている訳だ。これは利用出来るぞ。

正直、相手の射程外まで逃げての仕切り直しというのは、気分が良くないと思っていたからな。ここは正々堂々と逃げる事なく挑むとしよう。シルファリアとの会話で、アイツの魔法の欠点も見えてきたし。

動きを止めてシルファリアを見つめると、彼女が口を開いた。

「どうした？ 諦めたのか？」

そんな挑発には乗らないぞ。

「これからお前の魔法を攻略する。自分の魔法に自信があるのなら受けて立つよな？」

今度は、むしろこちらが挑発をする番だ。

「……面白<sup>おもしろ</sup>い。受けて立とう！」

予想どおり、プライドの高いシルファリアは俺からの挑戦を受けた。これでシルファリアはこちらの攻撃を回避しないだろう。

「だが、貴様が私に近づくのが不可能である事に変わらない！ 貴様に出来るのは、防御魔法を解除し、一か八か流星の攻撃を受けながら攻撃魔法を放つ事だけだ！ 私の流星雨を、防御魔法の加護<sup>かご</sup>を失って耐えきれぬかな!?」

シルファリアは俺に対抗手段がないと確信している。ならばその慢心<sup>まんしん</sup>、利用させてもらう！

俺はシルファリアのほぼ真下まで行くと、一旦しゃがみ込んで魔力障壁を体の上方に収束<sup>しゆく</sup>させる。流星雨は真上から降ってくるので、こうすればほぼ効かないのだ。それから足の守りに使っていた魔力のほとんどを足の裏に集中させた俺は、その力を跳躍力<sup>ちようやくりきく</sup>に変換して跳んだ。

飛ぶ方向は真上だ。

「無駄な事を……何!？」

余裕しゃくしゃくだったシルファリアだが、俺がグングンと上空へ上がってきたので顔色を変える。そして魔力塊の真横をすり抜けて迫<sup>せま</sup>ってきた俺を慌<sup>あわ</sup>てて回避した。

ただの人間である俺が、障壁を展開させたまま飛んでくるとは思わなかったのだろう。

彼女は啞然<sup>あぜん</sup>とした表情を浮かべていた。



俺は今、飛行魔法を使ってシルファリアの真上を飛んでいる。流星雨の追撃はない。「くっ！ まさかそんなデタラメな真似をするとは!? ……だが、私の魔法はどこにいうとお前を攻撃……っ!?」

お、どうやら気づいたみたいだ。さすがに自分の魔法の欠点は理解しているようだな。その欠点を突かれないために、シルファリアは上空を確保していたのだから。

「お前の魔法、確かに強力だが、大きな欠点がある。分かるだろう？」

「ちっ」

「お前の魔法は、魔力塊の位置が重要なんだ。位置によっては流星がお前を撃ってしまう事もある」

シルファリアの攻撃は俺を追尾してきていたが、彼女が流星雨と言っていたとおり雨のように一方にしか飛んでこなかった。つまりこの魔法の追尾機能とは、射出方向を変えられるという程度。コンピューター制御の追尾ミサイルではなく、砲塔が旋回するバルカン砲のようなイメージなのだ。

だから、シルファリアは上空で自分の真下に魔力塊を配置、そこから攻撃する事で自分に被弾する危険を封じていたのだろう。

よしこれで、後は魔力塊とシルファリアとの位置関係をキープしながら攻撃するだけだな。

そんな俺に対しておそらくシルファリアは、高速機動でフェイントを織り交ぜながら俺と位置取り合戦をしてくるだろうが、そうはさせない。今度はこちらがゴリ押しで攻めさせてもらう。

俺はシルファリアにまっすぐ突撃する。

「馬鹿正直な！」

シルファリアが回避行動を取る。だが、俺も同じ方向に軌道修正する。即座にシルファリアが反対側に動く。俺も追行する。

シルファリアがさらに動くように見せかけて、反対側に戻る。

フェイントだ。

だが、俺もギリギリで追いかける。シルファリアは攻撃が出来ない。俺はシルファリアの真正面を確保しながら彼女との距離を縮め続ける。接触までもう少し。彼女は魔法を発動させたままなので新しい魔法は使えない。

さらに距離が縮まる。

俺は魔法の袋から、かつて使っていた炎の魔剣を取り出す。そしてシルファリアに向かって振り抜いた。空を切った刀身から炎が飛び出し、シルファリアに向かう。

魔法剣「炎帝」は、その刀身に炎を宿し、剣を振れば炎の刃を放つ魔法の武器だ。

俺は炎帝で幾度も空を切り、炎刃をシルファリアに飛ばす。

「舐めるな！」

だが腐<sup>くさ</sup>っても魔王の娘。シルファリアが腕を振るうと、炎帝<sup>フレイムカザー</sup>から放たれた炎刃は、彼女の身を守る魔力障壁<sup>マジックバリア</sup>によって雲散霧消<sup>うんさんむしょう</sup>してしまった。

いくら魔剣の力といえど、シルファリアの魔力障壁には敵<sup>かた</sup>わないらしい。

「ふん！ こんな玩具<sup>がんぐ</sup>で私が倒せるものか！」

シルファリアは自らが吹き飛ばした炎刃の残り火を隠<sup>かく</sup>れ蓑<sup>みの</sup>にして、真横へ移動する。すると、俺は魔力塊の射程に入ってしまった。

シルファリアが嘲<sup>あざけ</sup>るように叫ぶ。

「小細工<sup>こざいく</sup>が仇<sup>あだ</sup>となったな！」

そんな事はない。ちゃんと炎帝<sup>フレイムカザー</sup>は役に立ってくれたさ。それは後ほど明らかになる訳だが。

「終わりだ、勇者！」

魔力塊から大量の流星雨が放たれる。俺を蜂<sup>はち</sup>の巣<sup>す</sup>にするために。

俺はとっさに横方向へ回避行動を取るも、流星雨はシルファリアの意思に従って俺を追尾<sup>おし</sup>してくる。

「無駄だ！」

だが――

「残念、これでもどうぞ！」

俺はあらかじめ魔法の袋から出しておいた大型の盾を突き出した。

「何っ!？」

突如<sup>とつじゆ</sup>現れた盾に、シルファリアが驚きの声を上げる。

そう、これが炎帝を出した本当の理由だ。炎刃で攻撃するために出したんじゃない。シルファリアの目から、この盾の存在を隠すために出したのだ。

「だが、盾ごときで私の魔法は！」

「それはどうかな！」

盾に流星雨が叩<sup>たた</sup>きつけられる音が響く。中級レベルの魔法の連打を受け続けられ、いかに硬<sup>かた</sup>い盾といえど穴だらけになる。

そうシルファリアは思ったはずだ。

だが現実とは違った。盾は流星雨にさらされ続けても、全く破壊される心配がない。

「ば、馬鹿な!? なんだその盾は!？」

シルファリアの顔が驚愕<sup>きょうわく</sup>に歪<sup>ゆが</sup>む。無理もない、自慢の魔法がただの盾に防がれているんだからな。

だが、これはただの盾じゃない。

「魔法盾『封魔<sup>フメイ</sup>の盾

そう、この盾もまた、炎帝と同じくマジックアイテムだ。  
かつて魔王を倒すための旅の中で手に入れたアイテムの一つであり、タンスならぬ魔法の袋の肥やしとなっていた品である。

もっと早い段階で出せば良かったんだが、ぶっちゃけた話、しばらく使っていない間にその存在を忘れていたのだ。何しろこれを手に入れたのは旅の中盤頃だったし、使わないアイテムってどんなのがあったのか忘れちゃうよね。

ともかくこれで流星雨の攻撃は完封出来る。

シルファリアの魔法は、起点である魔力塊から放射状に魔力弾を雨のごとくばら撒く。目の前で大きな盾を構えていれば、魔法が拡散する前に全部盾に当たって防げるのだ。

「くっ！ ならば全力でその盾を破壊してくれる！ それに、貴様もその盾を構えている間は攻撃が出来まい！」

はっはっはっ、そう思うだろう。

魔力塊が輝き、先ほど以上に激しく大きな流星雨が、封魔の盾に叩きつけられる。

盾はなんとか耐えているが、攻撃の勢いは激しい。ついに盾は吹き飛ばされてしまった。ただし俺ごと。

シルファリアの方向へと。

「な、何!?」

まさか俺そのものが吹き飛ばされてくるとは思ってもなかったのだらうな。

というのも俺は、盾を斜めにする事で吹き飛ばされる勢いを利用し、封魔の盾の裏にサーフィンのように乗ったのだ。一発一発が中級魔法に等しい威力を持つ流星雨の連打に抗うように、そのまま進んでいく。

勿論、酔狂でこんな曲芸まがいの行為をしている訳ではない。俺は魔力を両の拳に集中させる。

右手の親指に火、人差し指に風、中指に水、薬指に土、小指に光。

そして左手の親指に雷、人差し指に氷、中指に霊、薬指に空、そして小指に闇の一〇属性を纏わせ、左右から同時にシルファリアを殴りつけた。

「テンエレメントブロー!!」

「っ!? ファ、ファントムイリユージョン!!!」

俺の両手から放たれた、尋常ならざる魔力の奔流。それを感じ取ったシルファリアは、即座に流星雨の魔法を解除。空間属性の魔法で、己の存在をここであってここではないズレた次元へ避難させた。

それは、通常ならばあらゆる物理攻撃及びエネルギー系魔法から身を守る大魔法。そいつをシルファリアは、マジックアイテムの補助を活用して速攻で発動させたのである。だが、あいにくと俺の魔法攻撃には無意味である。



俺の魔法は、一〇属性同時攻撃。

かつて俺は、魔法戦闘で属性防御をされるのを面倒だと考え、全ての属性を同時に放つ事を思いついた。いわゆる全部乗せ攻撃だ。こうすれば、一つの属性が防がれてもそれ以外が全て当たる。

シルファリアの空間防御魔法は、俺の空間属性攻撃で無効化され、さらに残り九属性の魔力が彼女を襲う。

火が彼女の身を守る魔法のドレスを燃やし、風が音を封じて呪文詠唱を阻害し、水の蛇と土が四肢を拘束し、光が視界を奪いさらに聖属性ダメージを与え、雷が体を痺れさせ、氷が四肢を拘束していた水を固めて一切の身動きを取れなくした上に、寒さで動きを鈍らせる。

そして霊属性が魂にダメージを与え、闇属性が彼女の魔力を削り取ったところで、俺は動けなくなつて落下を始めたシルファリアの体を抱き止め、地上へと下ろす。

その結果。俺の目の前には、裸同然にひん剥かれ、痺れて体の自由が利かなくなり、魔力を著しく奪い取られた挙句、魂にダメージを受けたせいで意識も朦朧としている魔王の娘が、気絶寸前の有様となつてその体を固定されていた。

どうでもいいが、いや、どうでもよくないが、完全に犯罪のにおいししくないな、この魔法。

元々は強力な敵を拘束するために作つたはずだったんだが。相手が女の子なだけに、



メツチャ背徳感はいとくかんが漂たよっている。一応言っておくが、服を燃やしたのは武装を破壊して無力化するためだから。決してそっち目的じゃないぞ！

「その有様ありさまじゃもう反撃なんて出来ないだろう。大人しく降参こうさんしろ」

氣を取りなおしてシルファリアに投降こうじょうを勧める。つーか降参してくれないと、俺の理性が持たなくなる。さすがに拷問ごうもんとかする訳にはいかないしなあ。まあ特に拷問する理由もないが。

「……くっ、殺せ！」

「っ!？」

な、なんつー危険な台詞せりふを口にするんだ、このお姫様は！

あれか？ 魔王の娘だから姫騎士属性があるのか？ いや、姫騎士属性ってなんだよ！ エロい属性なのか!? いや確かに最初からエロい格好してたけどさあ！

思わず「くっくっくっ、殺せだど？ ふっ、そんな生易なまやまとしい真似などせぬ。貴様には絶望を味わってもらうのだからなあ！」とか言いたくなったわ！ そんな事言ったら人として色々引き返せなくなるわ！

「えーと……そ、そうだ！ 『貴様が勝ったら私を好きにするといい』 って言っただろ！ だったら、素直に負けを認めろ。負けを認めて生き残るのも王族の大事な使命だろうが！」  
 私がながら良い事を言った！ 言った気がする！ このノリだと本当にエロい事をしてし

まいかねん！ したいけどね！ だって目の前に半裸の美少女がいるんだよ！ 褐色肌かっしょくよはだもいよいよね！

「……ふん、ここまで辱められた上に戦いに敗れた魔王の娘など、誰が支配者の器うつわと思う？ いや、支配者の器どころか、女としてもはや取り返しがつかんわ。さあ、私を好きにするがいい」

いや、だってねえ。ほらノリと言うか、貴様が勝ったら私を好きにするといひなんて言われたら、ツイツイ張り切っちゃうに決まってるじゃないか。

しかし抵抗出来ない相手を無理やりというのは、さすがにやらないよ。俺がスルのはあくまでお互いに合意の上で、相手が望んでいる時だけだ。

「望まない相手とする気はないよ。あいにくとそこまで飢えてないんでな」

それは本当だ。今の俺には、望めば相手をしてくれる女の子が数百人単位でいる。わざわざ勇者としての名声を捨ててまで無理やり襲うメリットがない。

「なら、私が望めば抱くというのか？ 世界を支配しようとした魔王の娘であるこの私も??」

ややもすれば自嘲じちやう気味にも聞こえる感じでシルファリアが質問してくる。女として自信がないのかな？ いや、それとも勇者との戦いに負けた事で、自分には価値がなくなっただと思っているのか？ 魔族といえど力が全で。そういう考えが魔族的には普通な

「ああ、君が本気で俺に抱かれないと思うのなら俺も遠慮なく抱くぞ」

まさかそう来るとは思わなかったのか、シルファリアが目を丸くする。

「清廉潔白だったさ、勇者として戦っていた時はね。今はもう勇者として戦う必要もなく

厳密に言えば、以前は貰っている暇すらなかったというのが正しい。

シルフィアが豪快に笑いだす。だが、半裸で拘束台上に固定されたままのシルフィア

が笑うと、その素晴らしいおっぱいがバルンバルンと揺れて目の毒というか猛毒状態だ。

俺の理性のゲージが凄い勢いで減っていく。むしろ早くゼロになれ。

「ならば私を抱いてくれ。魔王の姫である私を抱いてお前の子を授けてくれ。私は敗者としてお前に身も心も捧げる。だからお前も勝者として私の身も心も抱いてくれ。これが魔族の姫である私からの勇者への敬意だ！」

「よし分かった！ 正直もう限界だったので、ありがたういただきます！」

俺はピヨーンとジャンプして臨戦態勢に入った。地上には人形の輪郭を保った俺の服が

「だがその前にこの拘束を……って!？」

シルフィアが何かを言ったような気がしたが、いい加減我慢の限界だった俺にはよく聞こえなかった。

だって金髪褐色の美女の裸だぜ？ しかも魔族娘は初めての相手だし。

拘束された女の子と合意で楽しむのも、なんだかそういうプレイつて感じがしていいよね。外せて言わなかったし、外す必要もないよね！

「だっ、まっ!？」

こうして、俺は魔王の娘と和解わかい。その直後に、合意の上、エロい事をしまくったのであった。その後、魔王の娘が一言。

「ううつ、変な趣味に目覚めてしまったらどうしてくれるんだ……」



「という訳で、トウヤの愛人になったシルファリアだ。よろしく頼む」

俺の腕に抱きつくシルファリアが、太ももまで俺に絡ませながらエアリア達に挨拶をする。

俺は、まるで抱き枕のような状態である。

「随分と仲が良くなったのね。そんなに情熱的に抱きつかれるほどに」

冷たくそう言うエアリアの視線が痛い。視線に物理攻撃力があるのではないだろうか？「私の体はもはやトウヤのもの。全身を拘束されて激しく愛されるのは、はつきり言って新しい世界が開けるぞ！」

開けてはいけない扉を開けてしまったシルファリアが、息を荒くして俺の腕に頼りしでてる。やべえ、エアリアがヒロインとは思えないような恐ろしい目つきで睨んでいる。

「貴女、魔王の娘なのに勇者の愛人になるってアリなの？」

また聞きづらい事をズバリと聞くなあ。

「ふ、魔族は力こそ全て。故にトウヤを恨む気持ちなどない。むしろトウヤの子供を孕んで次代の魔王にするつもりだ」

お、おおう。おっとこ前な台詞でありながらも、自らのお腹を慈愛に満ちた微笑で優しく撫でるシルファリア。そんな彼女からは母性さえ感じられたが、待つて、まさか子孫繁栄魔法とか使ってないよね？

「……ですが、魔王の娘ですか」

そう呟いて、ミューラが何とも言えない顔をする。

平和主義者なミューラの事だからってつきり、生まれてくる子供が人間と魔族が仲良くなる橋渡しをしてくれる、とか言ってる喜んでくれると思っただが。

「何か問題でもあるのか？」

「大ありよ！」

と叫んだのはエアリアである。

ミューラが冷静に告げる。

「シルファリアさんは魔王の娘です。これまで魔王は魔族を率いて人間の国々を好き勝手に襲ってきたのですから、シルファリアさんがトウヤさんのそばに、いえ人間の領域にいる事にさえ、人々は良い顔をしないでしょう」

坊主憎けりや袈裟まで憎い、いや親の因果が子に報うって訳か。それにもかかわらず、シルファリアがあっけらかんと言う。

「私は気にせんぞ。むしろ私としては、トウヤに魔王の座を継いでほしいとすら思っているからな」

「なっ!？」

なんという事を……

「なんていう事を言うんですか、貴女は！」

部屋の中に甲高い怒声<sup>いかだかどせい</sup>が響き渡った。

「サリア……」

そう、今怒鳴<sup>どな</sup>ったのは、かつて魔族によって滅びた国、トゥカイマの王女であったサリアだった。

「トウヤ様は勇者です！ 魔王になんてなりません！ 魔王の親にもなりません！」

サリアが凄<sup>けんまく</sup>い剣幕でシルファリアを怒鳴りつける。今までの物静かなサリアからは、とても考えられない激しさである。

シルファリアがさりとて言葉を返す。

「そんな事を言ってもなあ。私を愛人にと決めたのはトウヤだ。その証もたつぷりと貰ったぞ」

自分のお腹を撫でてサリアを挑発するのはやめなさい。

「っ!!」

まさに一触即発<sup>いっしんそくはつ</sup>。だが、戦闘に向いていないサリアが挑んでも無駄死にするだけだろう。シルファリアもソレを分かっているサリアを挑発したのか？

部屋の中は、これまで考えもしなかったほどに殺伐<sup>ころはつ</sup>とした空気になってしまった。どうしよう、これ何を言っても禍根<sup>かこん</sup>しか残らない流れだ。ああ、神よ、どうか我を救いたまえ。

「……」

エアリアが「全部アンタが招いた事なんだから自分で何とかしなさい」と言っているかのような目で俺を見る。

「……」

厳しいエアリアの視線から顔を背けた俺は、ミュウラに助けを求めるべく目で合図を送ると、ミュウラは残念そうな顔をして目をそらした。一瞬合ったその目は「自業自得<sup>じごうじとく</sup>なので擁護<sup>ようご</sup>不可能です。せつかく平和になった世界にいらぬ軋轢<sup>あつれき</sup>を生むのは間違いないので、ご自分の責任で話を纏めてください」と語っていた。

……仕方ない。こうなったら本当の意味で最後の手段だ。

「サリア、シルファリア、付いてきてくれ」

俺は、サリアとシルファリアを呼んで部屋を出る事にした。

その前に振り返って一言。

「エアリア、ミュウラ、数日ほど部屋に閉じ籠<sup>こ</sup>もるけど、絶対に中を覗かないでくれ。絶対<sup>絶対</sup>にだ」

「好きにすれば？」

「いってらっしゃい」

そうして、俺達は四日の間、この世界から姿を消した。





五日目の朝、俺は屋敷のリビングへ姿を現す。

「あら、おかえ……!?」

久しぶりに再会した俺の姿を見て、エアリアとミューラが驚いた表情をした。

いや正確には、俺の両腕にしがみついているサリアとシルファリアを見て、だ。

二人の間には数日前に漂っていた殺伐とした雰囲気など微塵もなく、よく懐いたワンコのように俺の腕にしがみついて頬ずりしていた。

「トウヤ様」

「トウヤ」

そこには、凛々しくも自信満々だった魔王の娘と、理知的だった王女の面影は、かけらもなくなっていた。

エアリアが眉間にしわを寄せて睨んでくる。

「な、何があった訳？」

ナニがあつたんですよ。

「サリアさんまで……」

ミューラは信じられないといった感じでこちらを見ていた。まあ以前のサリアの殺気

だった様子を見ているのだから、信じられないのも無理はない。

「ねえ、トウヤ、あんた一体二人に何をしたの？」

だからナニをしたんですよ。

つまり、地球産の仲良くなる方法を色々実践しただけなのである。なお、その方法はお子様には絶対に言えない内容なので割愛いたします。

まあ、殺し合いの憎み合いになるよりはエロエロの方がマシだろうって事です。エロは世界を救うのです。

だが、そんなあいまいな説明ではエアリア達は納得しなかった。

「あとで私達もトウヤの部屋に籠もるわよ」

「水と食料を用意しておきますね」

「待つて、待つて……せめて数日休ませてからにしてください」

本能的に全てを察したらしいエアリア達は、俺を部屋へと連行するのであった。それから地上に出るまでに掛かった日には、倍の八日でした。

自分の部屋なのに心休まらないってどういう事!?

二人が声を揃えて言う。

「自業自得ね」

「自業自得です」

## 第二話 勇者、警告される

「魔族が何か企んでいる？」

サリア達を説得してから十数日後、すっかり我が家に居ついたシルファリアが俺に警告してきた。それにしてもホントこいつ馴染んでるな。ちゃっかり自分分のソファアを用意してゴロゴロしてる。

「うむ、今回の人魔大戦では魔王陣営が敗北した。だが、その戦いの中で動かなかった者達もいたのだ」

「人魔大戦？」

俺は、聞き覚えのあるようなその単語に違和感を覚えた。

「人間と魔族による戦争の事だ。様々な種族間で戦争は起こっているが、規模としては我等の争いが一番大きいな」

「この世界では、そんな頻繁に戦争をしているのか？」

「うむ、何せ勇者を召喚する魔法などというものがあるくらいだからな」

言われてみればそうだ。めったに争いが起こらなければ、勇者召喚なんてピンポイント

な魔法は必要ないだろうからな。

「あ、思い出した！ 天竜族よ！ 人魔大戦って天竜族が言ってたじゃない。それで地上が壊滅寸前にまでなったって！」

エアリアが声を上げた。

天竜族。かつて地上に住んでいたが、地上での愚かな戦いにうんざりして、雲の上の浮き島に移り住む事を選んだ種族。

名前のとおり、彼等の見た目は人型のドラゴンだったが、なぜか女の子は角、ヒレ、翼、尻尾が生えているだけの人間型だった。それも美少女ばかりで可愛い女の子が多かったなあ。彼等が持っていた、魔王との戦いを終わらせるというアイテムを手に入れるために色々と苦労したんだ。何せ二〇〇〇年間鎖国していた種族だ。

彼等はドが付くような閉鎖的な連中だった。そんな彼等の中にいた、外との交流を望む若者達を突破口にして、俺達は天竜族の長老達を納得させる事に成功したのだ。

しかし天竜族か。確かに彼等はその話をしていた。自分達は二〇〇〇年前の人魔大戦を経験して地上を捨てたのだと。

シルファリアが口を開く。

「天竜族とは古い名前だな。もはや魔族でも天竜族を覚えている者は少ないだろう。私ですら書物で知っているくらいだから、若い魔族は本物を見た事がないはずだ」

どうやら天竜族の閉鎖性は筋金入りだったらしい。だからこそあんな事になった訳だが……

まあ今はその話はいい。

「それで話を戻すと、その人魔大戦だったけ？ 人間との戦いに出てこなかった魔族がいて、何かしようとしてると。結局、そいつ等ってのは何なんだ？」

「厳密には戦争に出ていない訳ではない。魔王が直々に戦ったのだ、配下の貴族が兵を出さない訳にはいかならないからな」

なるほど、あの戦いで俺が魔王に勝たなければ、後で魔王から「お前なんで援軍をよこさなかったんだー」って責められるもんな。

「とはいえ、私は当時はいなかった。父上の命で戦から遠ざけられていたからな。あくまでも生き残りの兵から噂として聞いた話なので確証もない」

けど、噂に過ぎないという確証もないって訳か。

「分かったよ。誰かが何かを企んでいるかもしれないと、肝に銘じておくよ」

そこまで話を終えた俺はソファーにもたれかかる。ふんわりとした感触が俺を包み、体がゆっくりと沈み込んでいく。これ、人間を駄目にするわ。

ちなみにこのソファー、中にヘブンフェニックスと呼ばれる超高級な鳥の羽をふんだんに詰め込んだ超絶高級品で、非常に座り心地が好いと評判の逸品である。エアリアが王都

に注文していたものがつい先日届いたのだ。

価格は金貨一〇〇枚はくだらないが、俺の財布から支払われたの言うまでもない。この屋敷には、他にも俺の知らない超高級家具が数多く設置されていた。エアリア曰く、経済を活発にするためとか。

いやまあ、細かい買い物を任せたのは俺なんだけども、財産があり余っているからといって、日本円で七桁の買い物とか平気でするのは勘弁してほしい。ちよとした大貴族みたいな買い物の仕方なんだぜ。

まあ、エアリアも今までの旅で結構な財産を手に入れているはずだから、自分の金でも買い物していると思うが……してるよな？

ふと思いついて、俺はシルファリアに声を掛ける。

「シルファリア、王都に行くから付いてきてくれ」

「うむ」

俺の言葉に応え、シルファリアが立ち上がる。

「トウヤの望みだ、私はどこまでも付いていくぞ。勿論ベッドへもな」

うっとりとした表情でそう言って、先ほどまでの真剣な雰囲気は台無ししてくれた。

「さ、行くぞ」

俺はシルファリアの発言を冗談と受け流し、その手を取って転移魔法で王都へ向

かった。

シルファリアがそっと呟く。

「つれない奴だ」



「で、俺の所に来たと」

やってきたのは、かつて共に魔王を倒す旅をした騎士、バルザックの屋敷だ。

シルファリアを愛人にした俺は、その報告と、彼女から警告された敵の存在をバルザックに告げに来たのだ。

「お前なあ……そりゃあ確かに世界中の女の子と宜しくしてこいとは言ったけどな。魔王の娘とまで仲良くしろとは言っていないぞ」

呆れたように言うバルザック。まあ俺も言われなかったからって好き勝手しすぎたとは……思わなくもない。

「トウヤには次代の魔王の父親になってもらうつもりだ。もしくはトウヤ自身に魔王の跡を継いでもらいたいと考えている。父上を倒したトウヤなら、他の有力魔族達も反対出来ないからな」

シルファリアが誇らしげに宣言する。つーか、余計な事言うな。俺はそうなるのが嫌で、元の世界に帰る気満々だったんだぞ。

「あ、そういえば。元の世界に帰るための、逆召喚の術式の研究ってどうなったんだ？」ある意味ではそれが本命の目的なので、戻ってきたついでに聞いておく。

「そっちに関してはまだだな。勇者の強大な抵抗力に引っかからないように術式を起動させる方法の、目処が立っていないのが現状だ」

なんという事だろう。俺が元の世界に帰るためには俺自身の力が邪魔しているのだという。

うん、前に聞いたわ。

「そんな訳で、諦めてこの世界で暮らした方が良くんじゃないかというのが、研究者達の見解だ」

それ研究するのを放棄しますやん。

「なぜ帰りがたがるの？ お前の力ならこの世界を支配する事すら容易だろうに」

「故郷に家族がいるんだよ。だからこの世界に残る訳にはいかない」

「やはり駄目か」

バルザックは諦めたようにため息を吐く。

「だとすれば、年単位で待ってもらう事になるな。元々魔法の研究には時間が掛かるもん

だ。勇者召喚関連は古い魔法な上に、国家機密きみつとして研究を禁じられていたからな」

うむ、仕方がないか。いくら強大な力を持っていたとしても、俺は魔法研究に関しては素人しょうと。

ここはプロの仕事を待つしかあるまい。

「ともあれ、陛下には俺から連絡しておく。伝えてほしい事はあるか？」

そうだなあ。何か言っておいた方がいいか。

「あー、俺はあくまでも元の世界に帰りたい。だからこの世界に長居ながいする気はないし、シルファリアを愛人にはしたけど、魔王の跡を継ぐ気もない。それでも俺が万が一にも魔王になるのが怖いのなら、世界中の賢者達を集めて、俺が元の世界に帰れるようにしてくれつつといてくれ」

「またギリギリの要求だな。各国がそう簡単に自国の賢者をよこすと思うのか？」

バルザックは呆れたように言って、ワインをあおる。

「さあね。だが俺を恐れつつも利用したいと思っているんだから、お互いの利益を考えれば賢者達を貸し出しても十分な元が取れるだろ」

「お前の異世界の知識目当てでか。お前も駆け引きが分かるようになってきたか。感慨深かんがいがはかいねえ」

わざとらしく「感動した」と言いながら、バルザックは二杯目のワインをあおった。適

当すぎるぞおっさん。

「じゃあ俺は城に行ってくる。お前等は王都でデートでもしてきたらどうだ？ 勿論その

羽や角やは隠してもらわんといかんがな」

と言いつ残してバルザックは屋敷を出ていった。後は待つだけか。

「ふむ、それではデートとやらに行くとするか」

そう言って、シルファリアがやにわに立ち上がり俺の手を取る。

個人的にはダラダラする気満々だったのだが、シルファリアがこうまでノリノリなのは仕方ない。俺は彼女を連れて、王都でのお忍しのびデートをする事にした。

「夫から話は聞いたわ。私がシルファリアさんのお洋服をコーディネートさせてもらうわね」

決意した直後、バルザックの奥さんが応接室に入ってくる。その後ろには様々な服を持ったメイドさん達の姿もあった。

「じゃあ早速お着替えタイムに入るから、トウヤ君は外で待っててね。魔族の女の子のコーディネートなんて初めてでお姉さん張り切っちゃうからー」

と言われるや否や、俺は押されるように部屋から追い出されたのだった。

「トウヤ様、お茶のお代わりはいかがでしょうか？」

部屋の外で待機していたバルザックの執事しじが、イスとテーブルを用意してお茶を勧めて